サマスタ
SUMMER STUDIO
2018

SUMMER STUDIO 2018
REPORT

発行：公益社団法人日本造園学会関東支部 / 第 14 回 学生デザインワークショップ　サマースタジオ 2018

SUMMER STUDIO 2018 INDEX

1　概要

開催趣旨 P2

聖火台と広場 P3

対象地 P5

2　各班提案

提案概要とテーマの捉え方 P7

プレゼンボード

A 班 P9

B 班 P13

C 班 P17

D 班 P21

変遷 P25

3　まとめ

サマスタ 2018　まとめ P31

スケジュール P33

参加者概要 P35

サマスタ
2018
SUMMER STUDIO

開催趣旨

オリンピック・パラリンピック本番まで２年。
準備が進んでいる会場設備の中で、唯一概要が公表されていない聖火台について提案を行う。
オリンピック・パラリンピックをきっかけに、多くの人が集まり交流する、都市における広場の意味を考え、社会に発信する機会とする。
また、大会後の運用や社会的意味についても提案の中に入れていく。

＜計画条件＞

1) アムステルダム（1928）大会の際、スタジアムの外に塔を設置して始まった聖火台の歴史と「パラリンピック聖火は皆のもの」という精神に則り、聖火台は誰もが目に触れることができる広場に設置する。

2) オリンピック・パラリンピック期間中は、表彰式やインフォメーションセンターなど多くの観覧者や観光客を受け入れるゲートウェイとしての場所となり、期間終了後もオリンピズムの精神である世界平和の象徴として、多くの人に愛される祝祭広場とする。

3) オリンピズムの精神と江戸・東京の歴史に通じる、新しい歴史を刻む場所としてふさわしい広場とする。

＜設計条件＞

1) 大会会場が集中しているヘリテージゾーン・東京ベイゾーンを範囲の目安とし、具体的に敷地を選定する。

2) 1万人程度の観客を収容できる規模（2ha程度が目安）とする。必ずしも 2ha のまとまったフラットな平面的広がりが確保できる場所でなくても提案が可能である。上記計画条件を踏まえ、選定した敷地の地形・植生・水系・交通・周辺建物など現況を充分に活かした広場とする。

3) 聖火台はモニュメントに限定せず、「オリンピック・パラリンピックの象徴」として独自の考えを示す。

サマースタジオHP : http://www.kanto.jila-zouen.org/designws/designws-index.htm

4班がそれぞれ敷地を選定し、新たな聖火台広場を提案

A team　祝祭を運ぶ
聖火台広場をきっかけに
河川敷に賑わいをもたらす

C team　海とともに生きる
TOKYO2020から始める
新たなライフスタイル

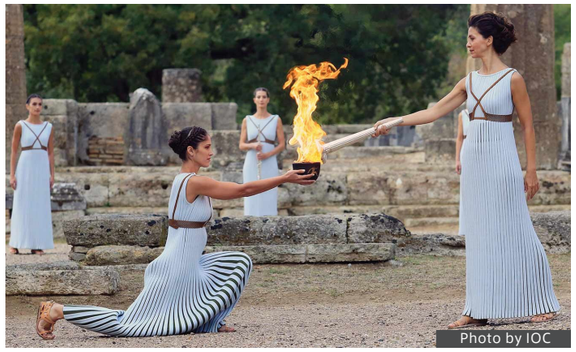
B team　にじむ境界

D team　重なる広場

聖火台と広場

古代と現代をつなぐ聖火

ギリシャ神話において、火は神プロメーテウスが天界から盗んで人類に伝えたとされている。そのため、古代ギリシャ人にとって火は神聖なものであり、古代オリンピックでは開催期間中に祭壇に火が灯されていた。
近代オリンピックにおいて、開催期間中に火が灯されるようになったのは1928 年のアムステルダムオリンピックからである。
聖火は古代オリンピックが行われていたオリンピア市のゼウス神殿跡で凹面鏡で太陽光を集めて採火される。その後、ギリシャ国内をリレーによって周った後、オリンピック開催国に運ばれる。そして開催国でのリレーが行われて、最終のランナーが開会式のクライマックスでスタジアムに設置された聖火台に点火する。



採火のセレモニー

近代オリンピックにおける聖火の扱い

近代オリンピックにおいて、聖火はオリンピズムの象徴として灯されている。オリンピズムとは「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する」という、クーベルタンが提唱したオリンピックのあるべき姿のことである。
開催期間中の聖火についてオリンピック憲章では、「オリンピック聖火は、はっきりと見える目立つ場所で、スタジアムの構造が可能ならばスタジアムの外からも見える場所におかなければならない」としている。

聖火は開催期間中灯され続け、聖火台の火が消えるときは大会が閉幕する時であるとオリンピック憲章の式典の条項にある。会期終了とともに聖火台の聖火は消されるが、その後火を灯すことは可能である。
また、聖火は分火して、聖火台以外で灯しても良い。

聖火リレー

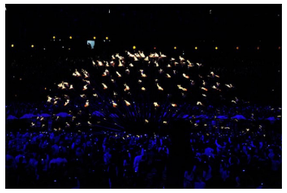
オリンピズムの象徴である聖火を掲げて走る聖火リレーは、開催国のプロモーションやメッセージ発信において重要な役割を担っている。
また、大会ごとに様々な工夫がなされ、多様な演出に注目が集まる。
環境への配慮を統一コンセプトとした２０００年のシドニーオリンピックでは、水中でも火が消えないトーチで世界遺産のグレートバリアリーフをダイバーが聖火を繋いだ。

近年の聖火台の事例

2010 年のバンクーバー冬季オリンピックの聖火台は氷柱を模したものであった。現在はバンクーバーの港沿いに置かれており、その美しさから観光スポットとなっている。

バンクーバーオリンピックの聖火台

2012 年ロンドンオリンピックの聖火台は、花弁のように開いていた小さなトーチが起きあがってひとつの大きな聖火台になるという仕組みになっており、その美しい情景が多くの人の心に残っている。



ロンドンオリンピックの聖火台

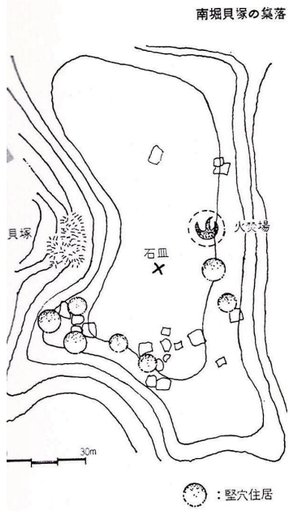
1964年東京オリンピックの聖火台

1964 年東京オリンピックの聖火台は、歴史ある川口鋳物の職人親子により作られたものである。旧国立競技場のバックスタンド中央最上段に設置されていた。現在は震災復興に取り組む石巻市に貸し出され、復興のシンボルとして展示・活用されている。この聖火台は 2020 年東京オリンピック終了後の新国立競技場に保存されることが決定している。
また、当時の聖火は大会終了後も 2013 年まで「希望の火」として鹿児島県立青少年研修センターで保管され続けていた。

点火の様子

日本の広場の歴史

日本には昔から広場のようなものが存在していた。例えば原始・縄文時代には縄文集落が存在し、その多くが 1 つの広場を取り囲むように竪穴住居が配置されていた。
これらの広場には主に 2 つの利用方法があった。1 つ目は、採取された貝や木の実、狩獣された獣などの共同化工場である火焚場、そして共同の饗宴の場としての利用、2 つ目は、当時の呪術的な宗教儀式を行う場としての利用である。
前者は生存のための物質的基礎の構築のため、後者は精神的安定を勝ち取るためだったとみられる。つまり縄文広場は、生産形式と文明の発展段階として、欠くことのできない存在であったということである。この後も時代に必要な機能を有する広場が各々形成されていった。



縄文集落

日本の広場

日本の広場は、物質的な空間に「広場化」という主体的行動があって、初めて存在できる人工的スペースである。例えば、祭があるときは神社内の空間に屋台を設置して装飾を施すことで広場化し、人々に特殊な雰囲気で体験させている。そして現代で一番身近な広場といえば、駅前広場だと考えられる。ここは、駅前の空間が人と待ち合わせのために人が滞在することで、広場となっている。

渋谷駅 ハチ公前広場

海外の広場

一方海外に目を向けてみる。イタリア語で「広場 (piazza)」は、「公の広場」あるいは「広場に集まった人々」、つまり「民衆」を意味する。西洋諸国の中でもイタリアは最も広場が発達した国であり、広場は市民にとっては特に憩いの場所である。
イタリアで有名な広場といえば、「ローマの休日」でお馴染みの「スペイン広場」である。ここで人々はショッピングしたり、カフェでお茶を飲んだり、散策したりしている。
海外の広場はコミュニケーションの場として機能しており、人々の活気あふれる生活の様子が反映される場所なのである。

スペイン広場

今までのオリンピック広場

これまで開催されていたオリンピックで、オリンピック広場が作られた例はいくつかある。その 1 つが 2012 年に行われたロンドンオリンピックの舞台となった、クイーン・エリザベス・オリンピックパークである。ここには開会式などが行われたメインスタジアムや各競技会場が集まっている他、たくさんのカフェやキオスク、子供達が遊べる遊具もある。オリンピック後はスタジアムがイングランドのプレミアリーグに属するサッカークラブチーム、ウェストハム・ユナイテッド FC の本拠地となるなど、オリンピック終了後も人々が訪れる場所として変化している。

クイーン・エリザベス・オリンピック・パーク

対象地

ヘリテージゾーン

1954 年の東京オリンピックにおいても使用された、伝統ある競技場が集中するエリア。

〈競技会場一例〉

1. オリンピックスタジアム（開会式、閉会式、陸上競技、サッカー）
2. 東京体育館（卓球）
3. 国立代々木競技場（ハンドボール）
4. 日本武道館（柔道、空手）
5. 皇居外苑（陸上競技競歩）
6. 東京国際フォーラム（ウエイトリフティング）
7. 国技館（ボクシング）

東京ベイゾーン

2020 年の東京オリンピックのために新設・仮説された競技場が集中するエリア。

〈競技会場一例〉

8. 有明アリーナ（バレーボール）
9. 有明体操競技場（体操）
10. 有明アーバンスポーツパーク（自転車、スケートボード）
11. 有明テニスの森（テニス）
12. お台場海浜公園（トライアスロン、マラソンスイミング）
13. 潮風公園（ビーチバレーボール）
14. 青梅アーバンスポーツパーク（バスケットボール、クライミング）
15. 海の森クロスカントリーコース（馬術）
16. 海の森水上競技場（ボード、カヌー）
17. カヌー・スラロームセンター（カヌー）
18. 夢の森アーチェリー場（アーチェリー）
19. 東京アクティスセンター（競泳、飛込）
20. 東京辰巳国際水泳場（水泳）

A team　荒川

B team　築地市場

C team　東京湾

D team　代々木公園

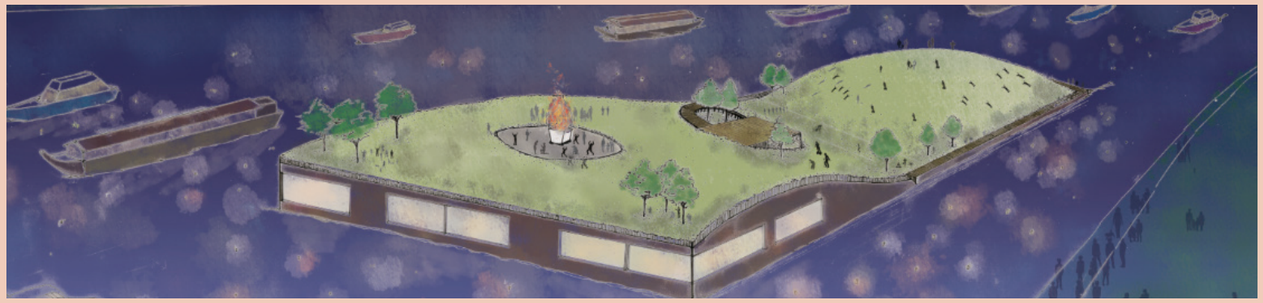
各班提案

テーマの捉え方

A班

祝祭を運ぶ
対象地：荒川

日本において、河川敷は広場として親しまれている魅力的な空間であった。しかし、現代で人と河川の関係は希薄になっている。そこで私たちは、動く聖火台広場を提案する。この広場がオリンピックの祝祭を運び、人々が河川敷に集うきっかけとなる。



聖火

聖火はオリンピックの祝祭を象徴するものであり、開催地に希望や賑わいをもたらす存在であると捉えた。

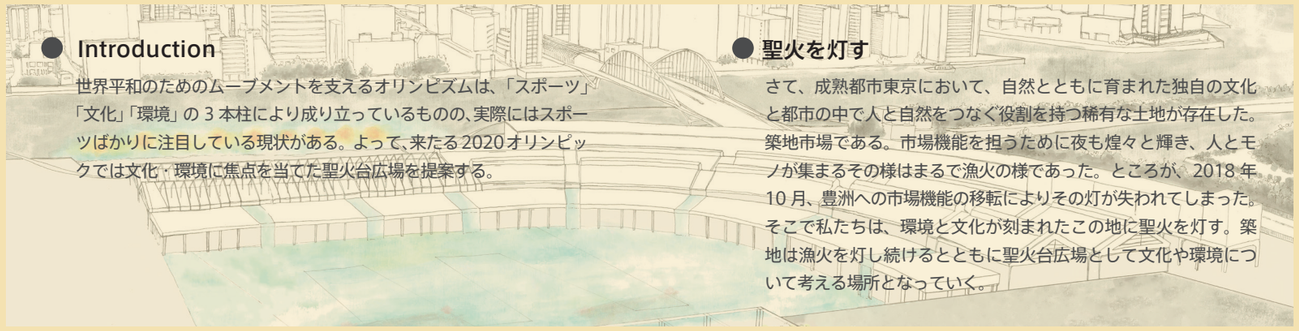
広場

江戸時代の河川敷のように、人が集う空間一体が水上・陸上問わず広場空間であると捉えた。

A班提案　P9 ▶

B班

にじむ境界
対象地：築地市場



● Introduction

世界平和のためのムーブメントを支えるオリンピズムは、「スポーツ」「文化」「環境」の 3 本柱により成り立っているものの、実際にはスポーツばかりに注目している現状がある。よって、来たる2020オリンピックでは文化・環境に焦点を当てた聖火台広場を提案する。

● 聖火を灯す

さて、成熟都市東京において、自然とともに育まれた独自の文化と都市の中で人と自然をつなぐ役割を持つ稀有な土地が存在した。築地市場である。市場機能を担うために夜も煌々と輝き、人とモノが集まるその様はまるで漁火の様であった。ところが、2018 年 10 月、豊洲への市場機能の移転によりその灯が失われてしまった。そこで私たちは、環境と文化が刻まれたこの地に聖火を灯す。築地は漁火を灯し続けるとともに聖火台広場として文化や環境について考える場所となっていく。

聖火

オリンピズムを象徴する灯であり、築地から失われた漁火を引き継ぐ灯。

広場

聖火を受け止めるうつわ。
広場そのものが聖火台として聖火だけでなく、訪れた人や自然、都市を受け止める。

B班提案　P13 ▶

C班

海とともに生きる
対象地：東京湾

TOKYO2020 をきっかけに海を媒介して人と自然の関係を結びなおす

● 対象地について

お台場・竹芝・晴海などそれぞれに特色のある地域とその中心に位置する海を一つの広場として右図のように定義して対象地とした。平和を象徴した聖火台を多くの人が見ることができる場所に設置することでより多くの人にオリンピズムを伝えていく。

● オリンピズムとテーマ

オリンピックにおける平和というワードを戦争をしないことだけでなく自然と共生することも含まれていると捉えた。今回のオリンピックをきっかけとして海と陸の境界線をデザインすることで、人と自然は共生しているということを再認識してもらえるようにする。

● 将来像

オリンピックをきっかけとして描く将来像として自然との関わり方の変化と日常的な舟運利用の活性化を考えた。

聖火

オリンピズムと日本人の精神的豊かさや文化を具象化し、それらを世代を超えて共有できるもの。

広場

人だけでなくモノや情報も行き交うコミュニケーションの場、そしてオリンピズムを伝える場所。

C班提案　P17 ▶

D班

重なる広場
対象地：代々木公園

様々なものの積み重ねの上に2020年東京オリンピックがある

▼

歴史や文化などの重なりを感じつつ、訪れた人々が新たな時代に向けた重なりの一部となるような広場

● 4つの「重なる」

新たな 歴史 を重ねる … 1964 年東京オリンピック＋2020 年東京オリンピックの歴史が重なった場所に

新たな 人の流れ を重ねる … 地上＋デッキ上の二層の人の流れが生まれる

新たな 文化 を重ねる … デッキができることで新しいイベントが生まれる渋谷駅とのつながりを生かし、国籍や文化を超えたコミュニケーションを育む場へ

新たな 環境 を重ねる … 歴史のある樹木＋新たに植えるデッキ上の樹木により今までにない立体の自然環境に

● Design

聖火

歴史を重ねるこの場に聖火を灯すことで 1964 年への敬意を表し、2020 年のオリンピックやこれからの日本に明かりを灯す象徴となる。

広場

2020 年東京オリンピックという新たな記憶が重なる今、新しい広場を作るよりも、歴史･文化･環境など、あらゆるものが蓄積している今あるものをより良くした広場が、聖火台広場として適すると捉えた。

D班提案　P21 ▶

A team 祝祭を運ぶ

聖火台広場をきっかけに
河川敷に賑わいをもたらす

summer studio で得たこと

小川 直哉
Naoya Ogawa
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「言葉の重み。」

[redacted]
「物事を図や絵で伝えることの大切さ。」

稲川 修平
Shuhei Inagawa
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「空間をデザインするときのアプローチの仕方を学ぶことができた。」

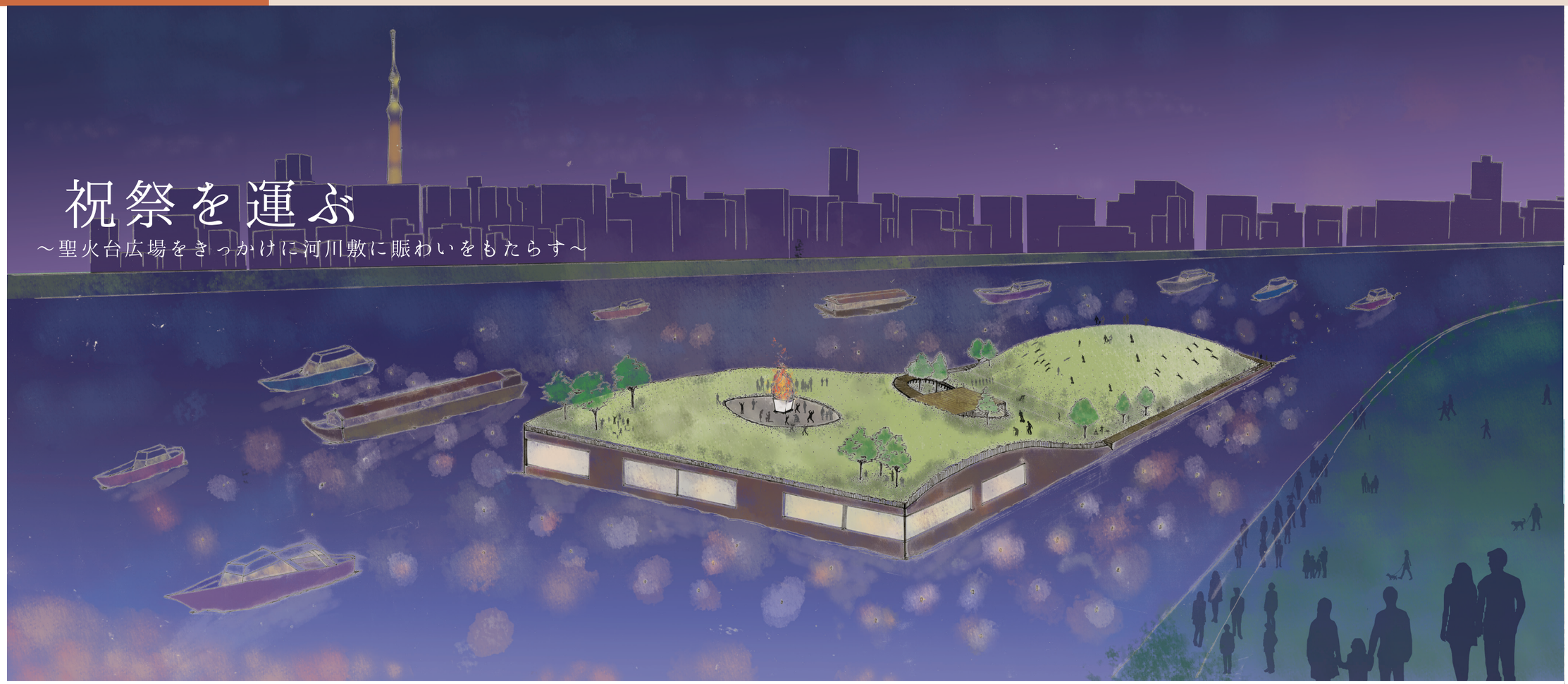
久保 翔太郎
Shoutaro Kubo
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「物事を幅広く知るという楽しさと、創造していく難しさ。」

谷本 実有
Miyu Tanimoto
千葉大学
園芸学部 B3
「場所について様々な視点やスケールでみることの面白さ。」

大木 一
Hajime Ohki
株式会社
オットー・デザイン
「東京における荒川の持つランドスケープ的なポテンシャル。」

岡田 裕司
Yuji Okada
株式会社ネイ&
パートナーズジャパン
「時間内に思考結果をプロセスも含めてカタチにする力の重要さ。」

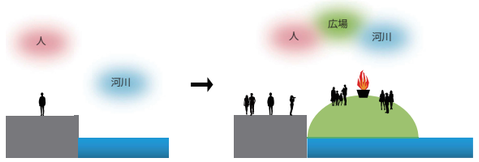
小澤 亮太
Ryota Ozawa
フィールドフォー・
デザインオフィス
「やっぱり、楽しんだもん勝ち。」



Concept

かつては水運が発達しており、河川敷に人々が集い、賑わいがあった。
↓
しかし、現代では人と河川との距離が離れてしまった。

水上・陸上問わず、人々が集い賑わうような広場空間を生み出そうと考えた。

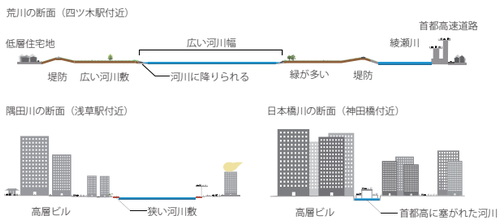


Site

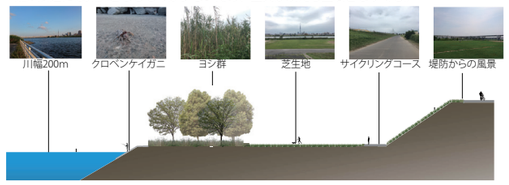
Site：荒川放水路
荒川は防災河川としてつくられたが、まちを分断してしまっており、周囲から浮いた存在となっている。
しかし、その特異かつ魅力的な空間性を活かすことで、水辺の賑わいを生む場所となるのではないかと考えた。

Analysis

東京の河川の断面図比較



荒川の魅力要素
・他の河川にない圧倒的な広い川幅、河川敷幅を有している。
・河川沿いに高層建築がなく、周辺は低層住宅地に囲まれている。
→開放的河川空間となっている。
・荒川周辺には光源となるものが少ないため、聖火が映える空間となり得る。



Proposal

動く聖火台広場を提案する。
この広場が祝祭を運び、人々が河川敷に集うきっかけとなる。

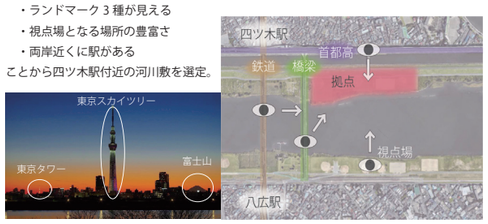
聖火はオリンピックの祝祭を象徴するものであり、開催地に希望や賑わいをもたらす存在であると捉えた。

オリンピック時、聖火台広場は以下のような動きで人々に祝祭を運ぶ

荒川に拠点を設けて水上を移動する
聖火台広場をつくる

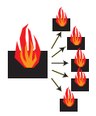
オリンピック後は荒川を中心に水上を移動してイベントを行ない、水辺に賑わいを運ぶ。
↓
いずれは海上を移動し、国内・国外へと祝祭を運んでいく。

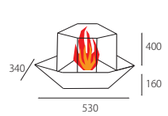
聖火台船の拠点（船着き場）となる場所は、
・ランドマーク３種が見える
・視点場となる場所の豊富さ
・両岸近くに駅がある
ことから四ツ木駅付近の河川敷を選定。



荒川からさらに広がる祝祭
荒川の支流の多さや水門を活かして、分化した聖火を東京の河川に流し、祝祭を運ぶ。
特に、暗渠化した渋谷川を利用すると新国立競技場へ聖火を運ぶことが可能である。

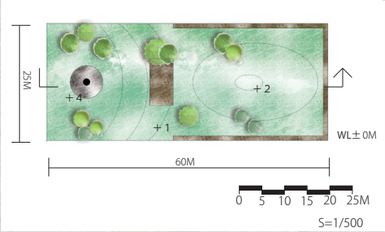
東京の水系図

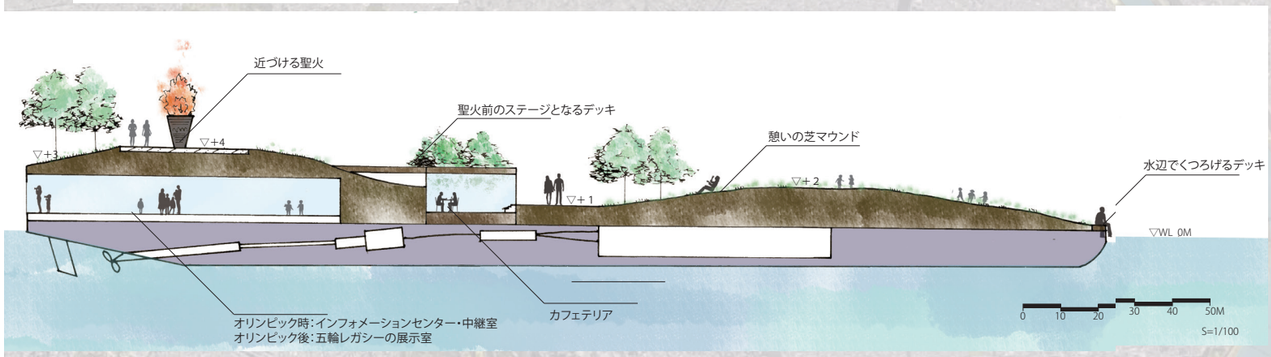

荒川→隅田川
神田川
渋谷川
など…

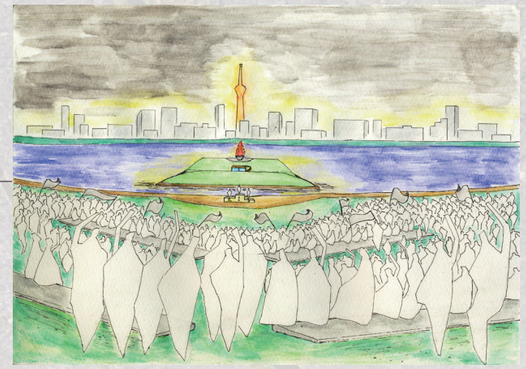


超小型船寸法

聖火台船デザイン



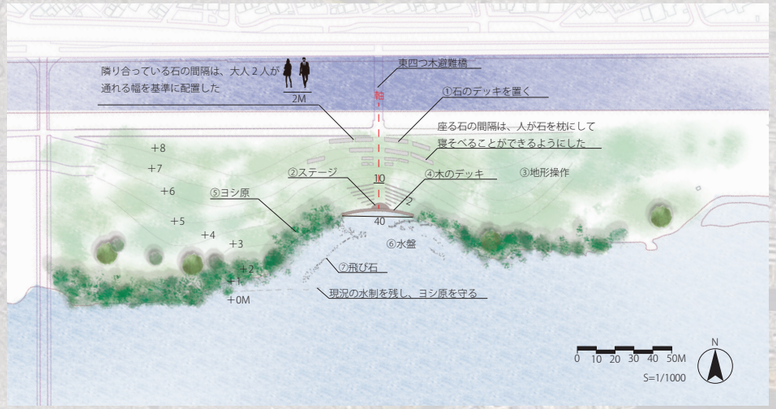




夜、拠点では表彰式が行われる。大勢の人が船や表彰者を囲むような形となっている。

凡例
- 拠点
- オリンピック会場

拠点デザイン

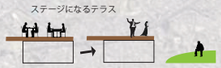


近づける聖火

マウンドにより自分の足で登って
聖火にたどり着く感動を味わえる。
アップダウンによる見え方の変化が楽しめる。

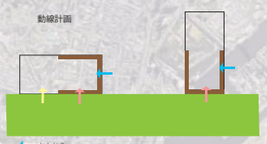
船着場にもなるデッキ

緑側のように回ったデッキは
人が腰掛けたり、船着場になったりする。
水上からのアクセスが可能となる。

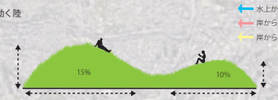


ステージになるテラス

カフェ上のテラスはステージにもなり、
マウンドに座って眺望しやすくなっている。

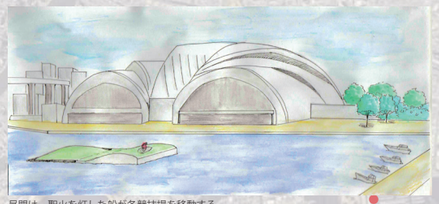


動線計画

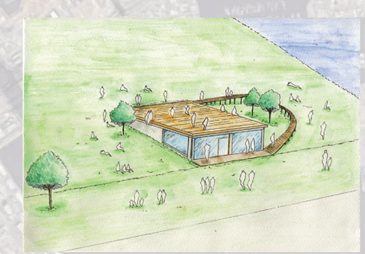


動く陸

聖火を積んだ舟が、聖火台広場として機能する。荒川沿いの平坦な地形とは対照的に、起伏に富んだ地形を採用。斜面勾配にも配慮し、座りやすい地形となっている。



昼間は、聖火を灯した船が各競技場を移動する。



船上の芝地には、ステージや休憩スペースとなるデッキがあり、中に入ることができる。

①人々が河川敷で過ごすための石

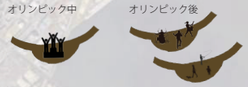
３種類の石を斜面に埋め込む。

人が座りやすい
高さとした。

のびのびヨガが
できる広さ。

屋台を置いても
人が歩きやすい広さ。

②オリンピックの表彰式をするステージ



表彰台に使用する

水辺の賑わいを生み出す

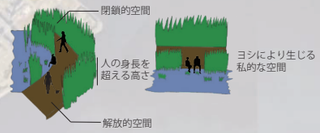
③集いやすい地形

拠点の地形を座りやすい 10%勾配に
することで、人々の滞留が生まれる。

④人々が水辺を楽しむデッキ

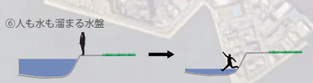
木のデッキは、船着場や散歩道などに
利用され、人と水の距離を近づける。

⑤水辺の散歩を楽しくするヨシ原



現況のヨシを利用。視界に変化を与え、空間にメリハリをつける。

⑥人も水も溜まる水盤

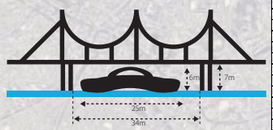


水盤によって、人と水がより触れ合うことのできる空間とした。

⑦変化の飛び石

高さの異なる飛び石は、水位の変化によって渡れる飛び石も変化する。
飛び石が見え隠れするため、景観にも変化を与える。

設計



表①より、拠点までの荒川に架かる橋梁の桁下と径間データを基に、最小である桁下 7m、径間 34mの橋梁でも通行可能な、縦 60m、横幅 25m、高さ 6m（聖火を含め）の大きさの舟を採用。

【橋梁一覧】

荒川		
橋梁名称	桁下高さ (AP.+m)	径間(m)
首都高速湾岸線	27	150
荒川河口橋	27	150
京葉線鉄橋	27	150
荒川ロードパーク(建設中)	27	150
東西線鉄橋	12	150
葛西橋	6.5	142
新宿線鉄橋	10	78
篠崎橋	10.4	110
荒川大橋	12.4	168
新小岩荒川橋	8.8	34
総武線鉄橋	7.6	38
平井大橋	6.8	66
木根川橋	11	49
押上線鉄橋	8.3	57
新四つ木橋	7.3	80
四つ木橋	[illegible]	81

―表①―

B team にじむ境界

summer studio で得たこと

小山 新平
Shinpei Koyama
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「自分自身の現在地とコミュニケーションの大事さ」

廣田 龍平
Ryuhei Hirota
日本大学
理工学部 B4
「広場の普遍的な空間を超流動的にとらえる視野を得た」

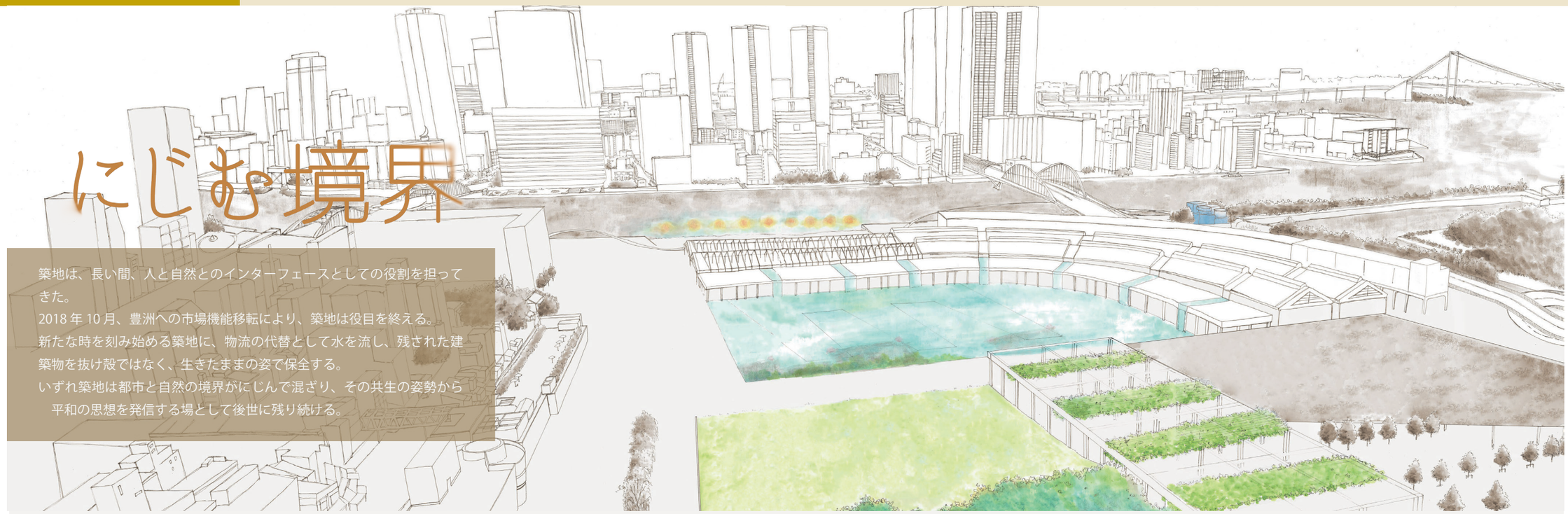
岩切 菜月
Natsuki Iwakiri
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「他大学の学生との交流による刺激」

出立 琳
Rin Dedachi
千葉大学
園芸学部 B3
「視野の広がり」

松田 彩花
Ayaka Matsuda
東海大学
観光学部 B3
「新しい出会いと新しい世界」

原﨑 寛明
Hiroaki Harasaki
ハイアーキテクチャー
「東京五輪という現在的なテーマで議論と設計を濃密にやれたこと」

小林　裕太
Yuhta Kobayashi
株式会社
プレイスメディア
「難しいことでも与えられた時間のなかで決められたテーマに対し、正面から挑戦することの大切さ」



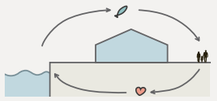
築地は、長い間、人と自然とのインターフェースとしての役割を担ってきた。
2018 年 10 月、豊洲への市場機能移転により、築地は役目を終える。
新たな時を刻み始める築地に、物流の代替として水を流し、残された建築物を抜け殻ではなく、生きたままの姿で保全する。
いずれ築地は都市と自然の境界がにじんで混ざり、その共生の姿勢から平和の思想を発信する場として後世に残り続ける。

00. introduction

世界平和を目指すムーブメントのうちの 1 つであるオリンピック。
それを支えるオリンピズムは、「スポーツ」「文化」「環境」の 3 本柱で成り立っている。しかし、そのうちのスポーツばかりに注目が集まっているのが現状である。
よって、来たる 2020 オリンピックでは、文化・環境に焦点を当てた聖火台広場を提案する。

オリンピズムの三本柱

築地市場は自然とともに育まれた独自の文化を持ち、都市の中で人と自然をつなぐ役割を持つ稀有な土地だ。市場機能を担うために夜も煌々と輝き、人やモノが集まるその様子はまるで漁火のようであった。ところが、2018 年 10 月、豊洲への市場機能の移転によりその灯が失われてしまった。
そこで、環境と文化が刻まれたこの地に聖火を灯す。
築地は漁火を灯し続けるとともに、聖火台広場として文化や環境について考える場所となっていく。



01．分析

現市場を広場へと再構築するにあたり、まず、市場にある建物を調査・評価し、建築年数・耐震状況。既存用途などの観点から、残し活用するものを判断する。

02. 敷地変遷

市場機能をもつ建物群と日本一の物流を支える広大な駐車場が広がる。

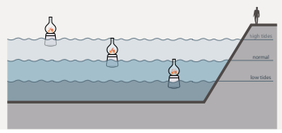
R の建築はその大きさと動線の良さを活かし、インフォメーションセンターに。
その外側にある旧本館はホステルとして、宿泊機能の不足を補う。

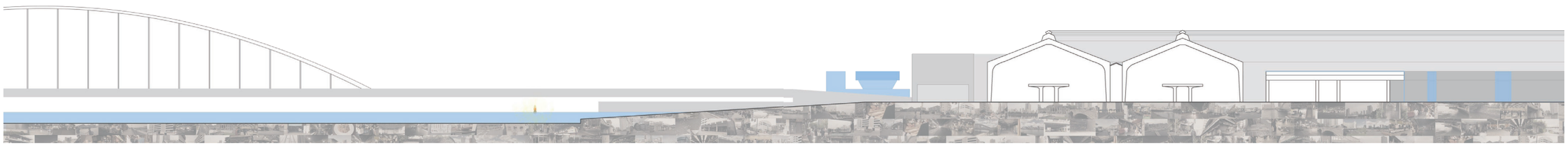
R の建築は、かつて市場内にあった銀鱗文庫の発展形として、書物や物を置く資料館として活用する。

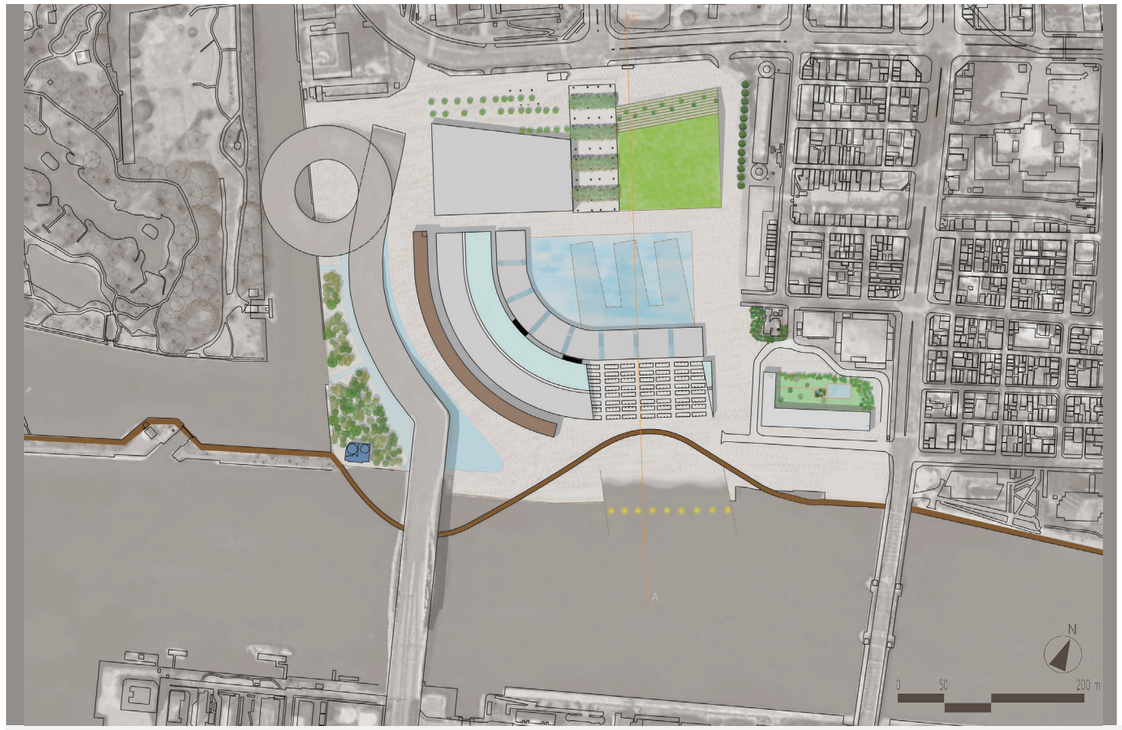
03. 聖火台

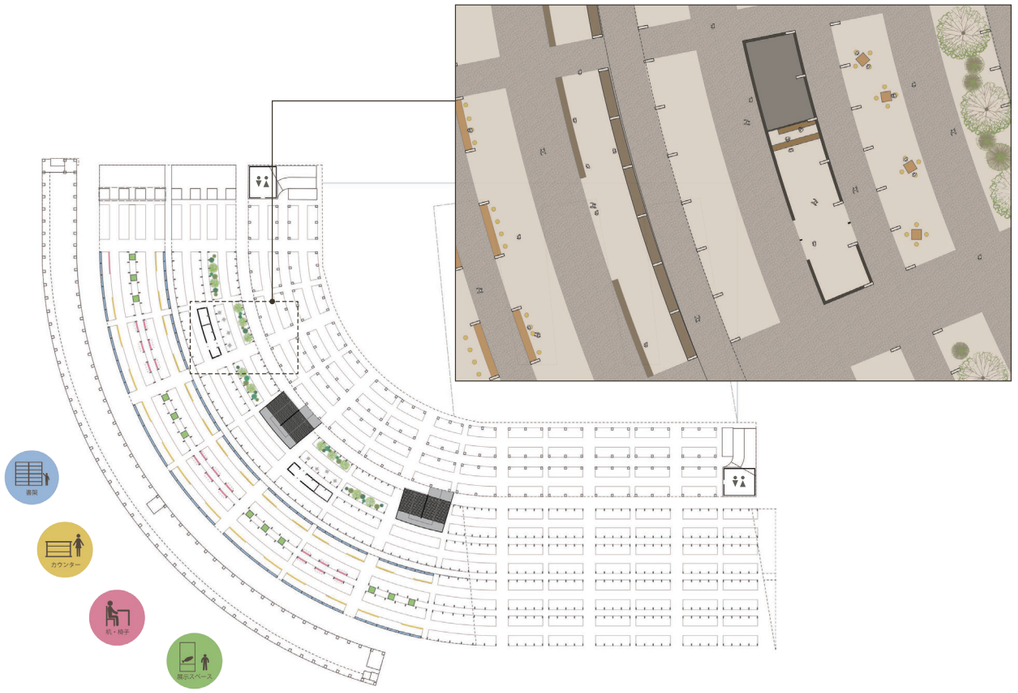
潮位に合わせて、聖火も上下する仕組みとし、潮位の変化を可視化する。川面に反射するいくつもの聖火の光は、魚を呼び込むために焚いた漁火のように、訪れた人々を水辺に導く。

聖火は、人を呼び込む漁火を模したデザインにする。築地の市場機能が豊洲移転することで消えようとしている灯を、聖火という新たな明かりにより灯す。人と人、人と自然が交わり続ける空間になる。





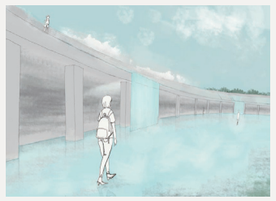


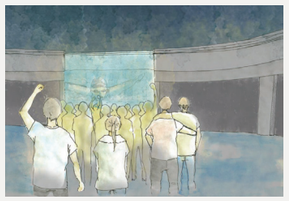


04. 水景

築地市場は衛生状態を保つため隅田川から汲み上げた水をろ過して、撒いていた。そのため、市場内の地面は常に濡れていた。
市場解体後もこの浄化システムを活用し、広場内に水景をつくる。

引き込んだ水は、都市を映し出す水鏡として広場の地面を満たす。この水景のデザインを通して、海から仲卸への自然を人が享受する一連のモノの流れを顕在化する。





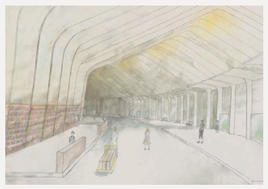
05. 芝生広場と藤棚

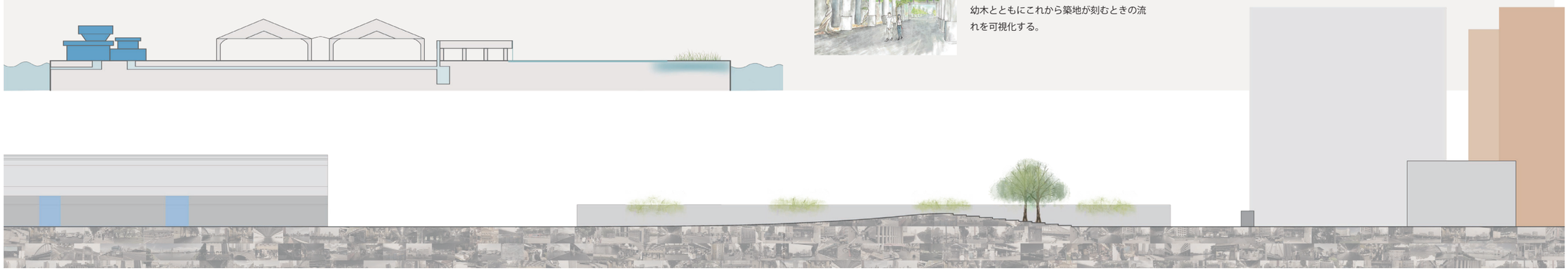
護岸を掘って出た浚渫土を用いて、市場北側に芝生のマウンドをつくる。これにより訪れる人々の視線を正門の藤棚へと絞る。
また、マウンドの歩道側には幼木を植える。幼木はこれから築地が刻む時の流れを可視化させるとともに、中央の水鏡に映る都市の風景に樹冠のみどりが挟みこまれる。

かつて車のみが利用していた正門を人のための入り口に造り変える。
建築は骨格を残して藤棚とし、芝生広場の幼木とともにこれから築地が刻むときの流れを可視化する。

06. 資料館

築地市場のシンボルともいえるＲの形をした独特な建築は、かつて築地市場内にあった「銀鱗文庫」や市場時代に使われていた物の展示を行い、築地の文化や食に対する考え方を示し継承させる。





C team 海とともに生きる

TOKYO2020 から始める新たな
ライフスタイル

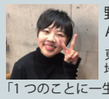
summer studio で得たこと

西内 元活
Masakatsu Nishiuchi
法政大学
デザイン工学部 B4
「他分野の人々と共同で作業する難しさと面白さ。」

國井 優樹
Masaki Kunii
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「デザインの本質と自分の限界を知る、いい機会になりました。」

侯 斯弋
Kou Shiyoku
多摩美術大学
美術研究科 M1
「初めて日本の学生とともにデザインをやり、コンセプトなど設計計画についていろいろなことを学ぶ機会。」

差波　楓
Kaede Sashinami
東京農業大学
地域環境科学部 B3
「コンセプトやデザインの基本的な決め方、話し合い方、基礎の基礎をしっかりと学べた。」



野尻 明里
Akari Nojiri
東京農業大学
地域環境科学部 B4
「1 つのことに一生懸命になる大切さ。」

向山 雅之
Masayuki Mukouyama
株式会社
竹中工務店
「多様な専攻の学生が集い、議論し、瑞々しいアイデアを未来へ発信する場。」

杉山 茂樹
Shigeki Sugiyama
株式会社
日建設計
「フィールドから得たインスピレーションの大切さ。」

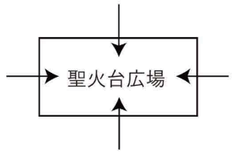
井野 貴文
Takafumi Ino
株式会社
グラック
「形を描けるという能力はどの業界でも共通して汎用性のあるものという価値観。」

海とともに生きる

― TOKYO2020 から始める新たなライフスタイル―

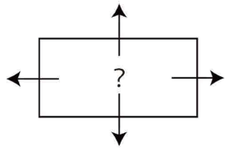
C 班　メンバー　西内元活　野尻明里　コウシヨク　國井優樹　差波楓
チューター　向山雅之　井野貴文　杉山茂樹

課題

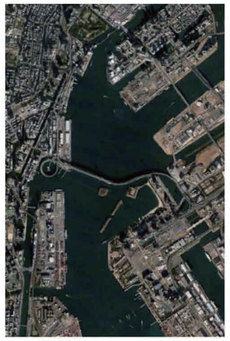


- 誰にでも見える聖火台
- 観光客のゲートウェイとなる
- 2ha に 1 万人を収容する
- 敷地の現況を活かした広場
- オリンピックパラリンピックの象徴として独自の考えを示す

大会終了後



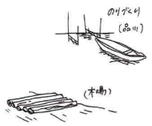
- 世界平和の象徴として多くの人に愛される祝祭広場
- 大会後の運用
- 社会的意味



- 竹芝
  伊豆・小笠原からの玄関口
- 晴海
  環境先進都市のモデルケース
- 豊洲
  市場の活気と賑わいを活かす
- 有明
  市スポーツとイベントで賑わうまち
- お台場
  アーバン・ウォーターフロント
- 竹芝
  物流の集積地
- 日の出
  地域舟運の中心拠点

コンセプト・現況

江戸時代 ― 明治～平成 ― 2020 ― 未来



「生きる」ために　　「豊かに生きる」ために

海と共に生きていた　　海と分離して生きていた　　海と共に生きる　　海との新しい関わり方

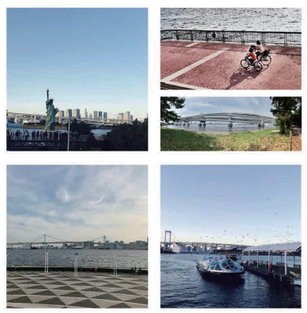


図 .1 公園と陸上交通の状況

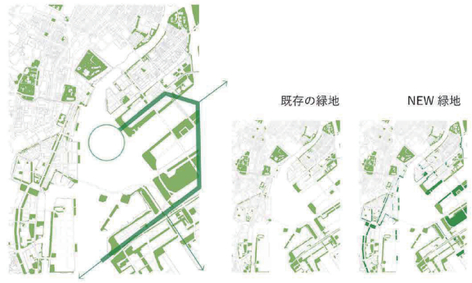
図 .2 陸上交通・海上交通の状況

- 倉庫
- 商業施設
- オフィスビル
- 住宅
- 船着場
- 学校

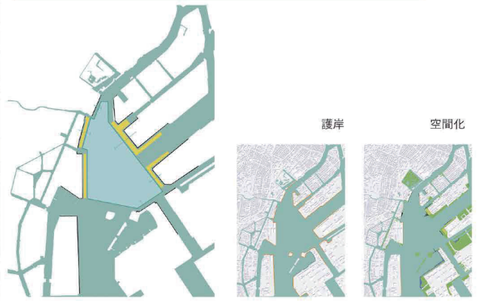
MASTER PLAN

手法

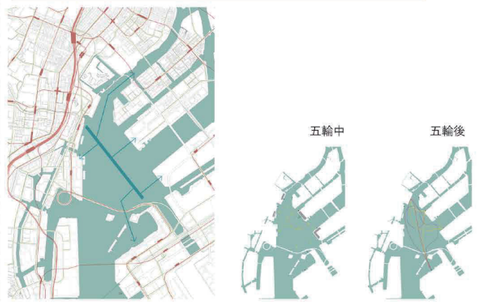
緑のネットワークの一体化

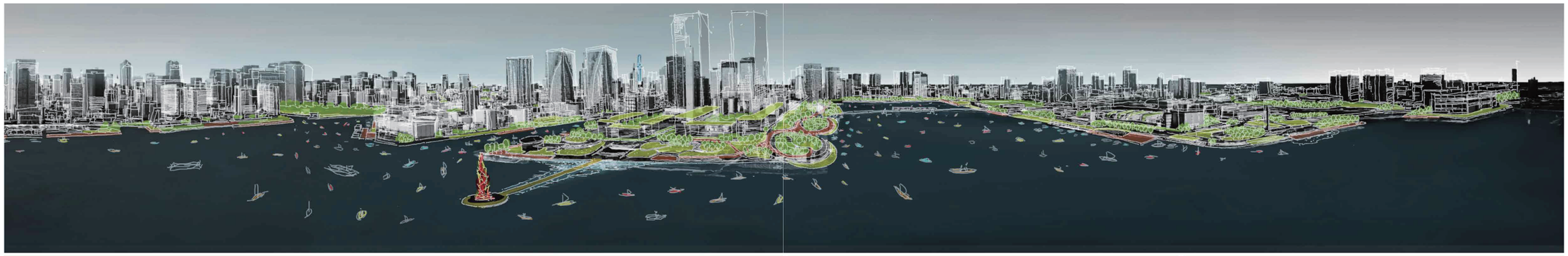


海岸線の改造・親水性空間の構築



舟運ネットワークの補強

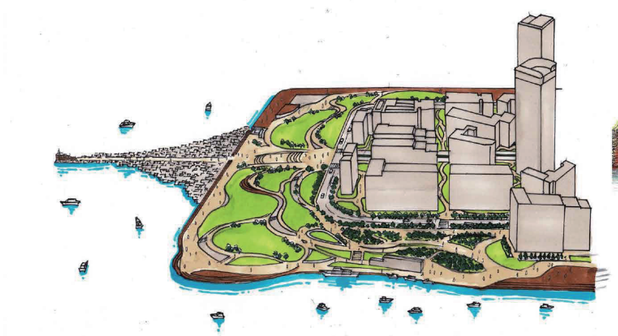




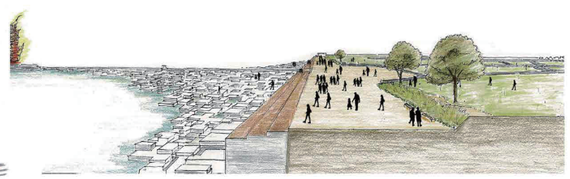
デザイン　五輪中　五輪後

晴海公園

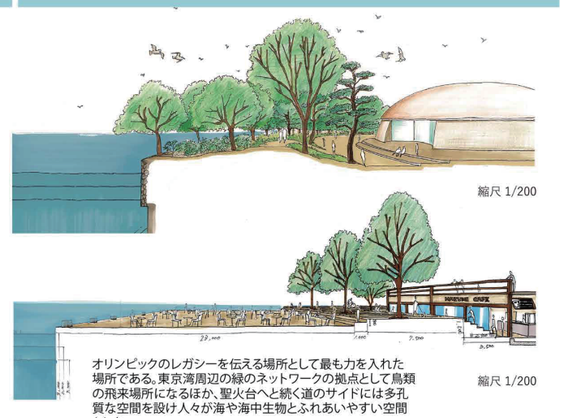
晴海埠頭公園　平面図



晴海埠頭公園　パース



晴海埠頭公園　断面図

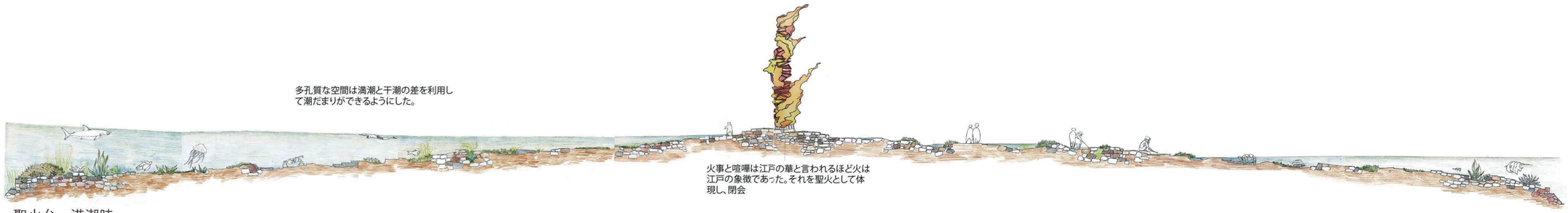


オリンピックのレガシーを伝える場所として最も力を入れた場所である。東京湾周辺の緑のネットワークの拠点として鳥類の飛来場所になるほか、聖火台へと続く道のサイドには多孔質な空間を設け人々が海や海中生物とふれあいやすい空間とした

聖火台広場

多孔質な空間は満潮と干潮の差を利用して潮だまりができるようにした。

火事と喧嘩は江戸の華と言われるほど火は江戸の象徴であった。それを聖火として体現し、閉会



聖火台　満潮時

聖火台　干潮時

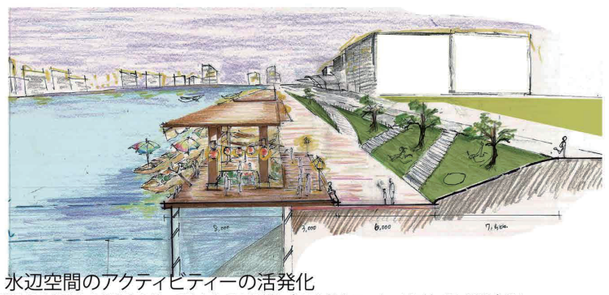
船着場と船

日常的な舟運ネットワークの利用

海上交通の活性化による舟運ネットワークの強化。
現在の観光利用のみならず周辺住民や通勤客の日常的利用を見込む。
また、1人でも乗れる小型モビリティーも利用して内港地区の利便性が格段に向上する。

水辺空間のアクティビティーの活発化

オリンピック中はサテライト会場としてパブリックビューイングを展開
閉会後は憩いの場としてテラスを設置するほか、マリンスポーツの拠点として機能する。



水辺空間のアクティビティーの活発化

関東近郊の各地から川や海を使って取れたての新鮮な食品を船上マーケットに並べる。豊洲市場と並んで日本を代表する色の発信地となる。

縮尺 1/150

D team 重なる広場

summer studio で得たこと

田中 真由
Mayu Tanaka
千葉大学
園芸学部 B2
「学ぶべきことを知れたこと、設計の難しさと楽しさ。」

岩瀬 晃
Kou Iwase
東京農業大学
地域環境科学部 M1
「自分に足りないものがサマスタを通して明確になった。」

田邉 喬太
Kyota Tanabe
法政大学
デザイン工学部 B4
「1 からつくる楽しさ、メディアを変えて違う視点から見ること。」

長尾 梓
Azusa　Nagao
多摩美術大学
美術学部 B3
「さまざまな角度から聖火台広場について考えることができました。」

中田 朱音
Akane Nakata
多摩美術大学
美術学部 B3
「沢山話し合いながら作品をつくることの難しさ、楽しさを知った。」

西崎 太晴
Taharu Nishizaki
東京農業大学
地域環境科学部 B2
「爾今以後の振る舞いについて。」

岸　孝
Takashi Kishi
株式会社
プレイスメディア
「地形、歴史 (人) によるアフォーダンス。」

大石 茉由佳
Mayuka Oishi
株式会社
日建設計
「想いを込めて設計すること。」

2020 年、東京オリンピック。
私たちはどのようなムーヴメントを
東京に刻むことができるのだろうか。
歴史・文化・環境 ... 全てのものが
この土地に蓄積し、未来に残っていく。

そんな重なる時代に新たな記録を残す、
重なる広場。

テーマ「重なる」

重なりの上で実現する ＝ 2020 年　東京オリンピック

↑

様々な重なり ＝ 街 / 想い / 競技場 / 人 / 歴史

対象地 代々木公園

歴史が重なった土地
- 江戸時代　武家地
- 戦時中　練兵場
- 戦後　ワシントンハイツ
- 1964　東京オリンピック選手村
- 代々木公園　誕生

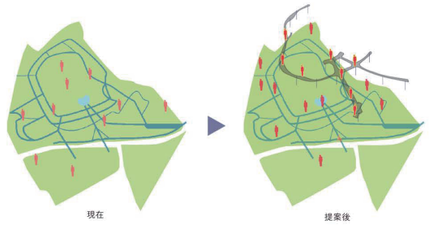
用途が重なったた土地
- 都都心の緑の中心地
- 住住宅地
- 商業地
- アクセスが良く賑わいがある

↓

【新たな重なり】2020 聖火台広場

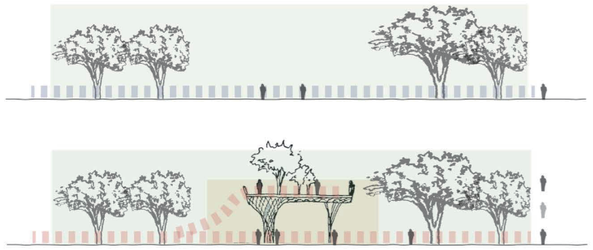
人の流れを重ねる

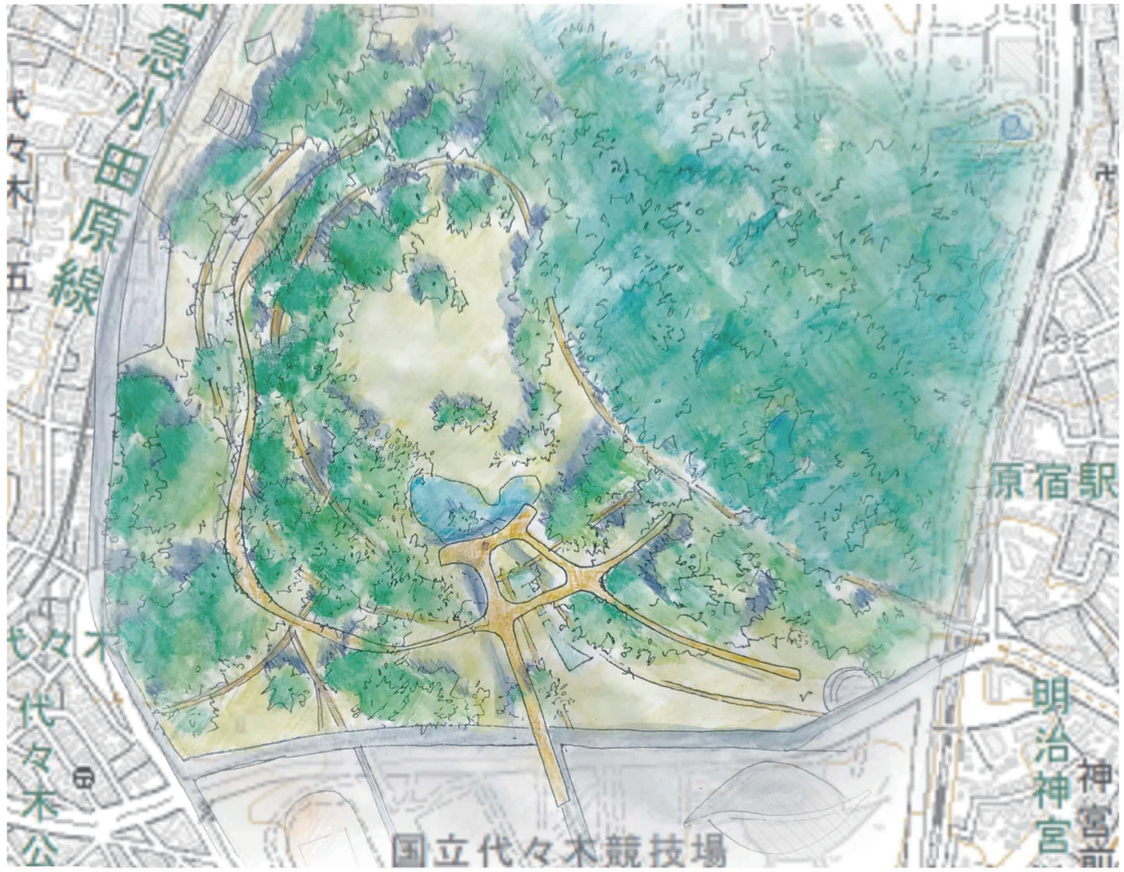
空中回廊により、「地面レベル」・「回廊の上」の
２つの人の流れを生み出す。地面 / 回廊上の２つの
過ごし方により、人々は上下を自由に行き交い
新たなくつろぎの広場としてたくさんの人に親しまれる。



環境を重ねる

代々木公園の緑を様々な角度から
体感できる空中の回廊。これにより、
樹木の揺らぎや鳥のさえずりを
豊かに感じることができる。
デッキ上のところどころで見られる
植栽は、歩きながら見える景色に
リズムをつけ楽しく一周できる
ような空間を作る。





歴史を重ねる

前回オリンピック時に提案されたペデストリアンデッキ。
1964 年の歴史に重なるこの回廊は代々木公園に溶け込み、いつしかそれ自体が 2020 年のシンボルになる。

【実現するはずだった幻の案】
池原謙一郎のコンペ案
（公募の中で最上位入選作）
空から森と園路を楽しめる空中デッキを配した

【現在の代々木公園】
池原案はケヤキ並木から公園の入り口部分の
一部のみ実現。空中デッキがあるはずだった
位置は地面レベルの道に変更

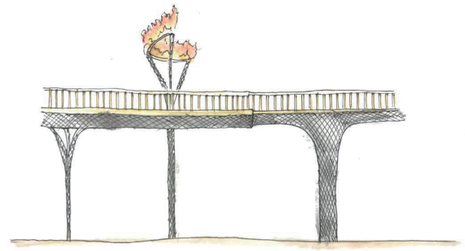
【提案】
50 年の歴史を経て生まれた空中回廊は、
池原氏の描いた線をリスペクトしつつ、
現代に馴染む柔軟な使われ方・形態になる
よう変化を加えた。

文化を重ねる

これまで、国際的で自由に開かれた広場として愛されてきた代々木公園に新たな使われ方を生む空中回廊。
２層で１つのイベントを楽しむもよし、２層で別々のイベントを行うもよし。
または、どちらかでイベントを行い、もう１層が動線となるなど、今後の使われ方の可能性を広げることができる。

聖火台について

ここ代々木公園は、1964 年東京オリンピックの歴史が残る場所である。
歴史を重ねるこの場に聖火を灯すことで 1964 年への敬意を表し、
成果は 2020 年のオリンピックやこれからの日本に明かりを灯す象徴となる。
オリンピック後は聖火台はモニュメントとして、代々木公園に残り続ける。

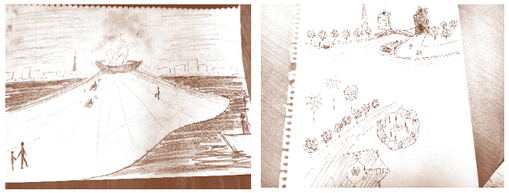


変遷

PHASE 1

各々のイメージを共有

現地調査前に各々が、考えているイメージを絵に描くことで共有した。



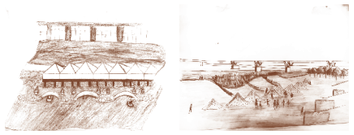
PHASE 2

荒川での提案

対象地を荒川として、荒川で何ができるか、何が必要かをみんなでアウトプット。

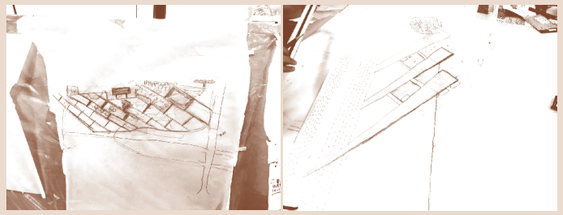
PHASE 3

アイディアヴィジュアル化



みんなでアウトプットした内容を絵にして、デザインにしていった

PHASE 4 **中間発表**



河川敷に船や SUP などが発着できるようなデッキなどを配置した。
しかし、聖火をどこに置くかを忘れていた。

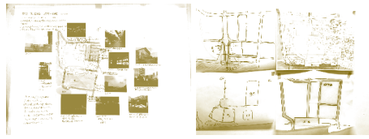
PHASE 1

対象地の決定

対象地が確定したのは、発表が始まる 1 時間前。最終候補だった築地市場、両国、晴海埠頭の中から、築地市場に決定。

PHASE 2

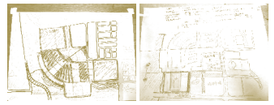
対象地の再評価



時間帯ごとに手分けをして 1:00～ 20:30 と築地の 1 日を再度現地調査。築地市場の常に人の出入りが絶えない 24 時間性や川辺の視認性を評価。

PHASE 3

広場機能の検討

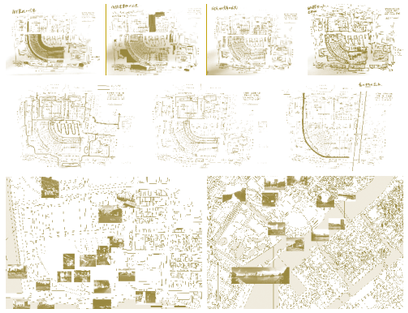


市場の移転によって築地という街がどう変わっていくのかを考察しながら、広場にどのような機能をもたせていくのかを検討。

PHASE 4

対象地及び周辺のスタディ

オリンピック前後で段階を踏み減築しながらデザインすることに。減築の基準を定めるために、市場建築に関するスタディをひとつひとつ進めた。市場内外の持つコンテクストを考慮しながら、広場のデザインを検討。23ha の広大な敷地面積対して、オーバースケールな設計にならないように何度も現地に足を運び、その空間の感覚をつかんでいった。



PHASE 1

オリンピックについてのイメージ共有

オリンピズム、広場の意味、舟運の先進事例など気になることをとにかくピックアップ。

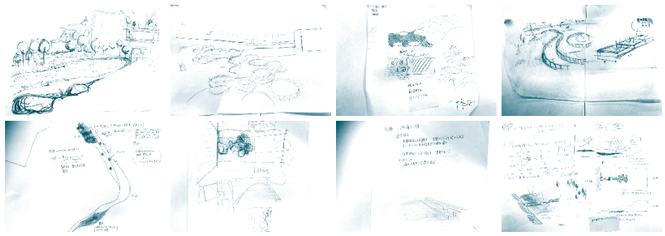
PHASE 2

対象地の選定

現状の対象地となりうる場所をピックアップし、東京湾内港地区を囲うエッジの部分すべてを対象地とした。

PHASE 3 **ラフスケッチでの案だし**

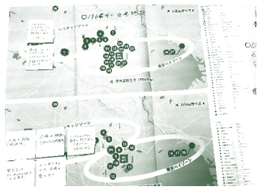
水辺の空間において陸と海の関係性を重視し、
水辺が人にとって身近になるよう考えた。



PHASE 1

コンセプトの検討

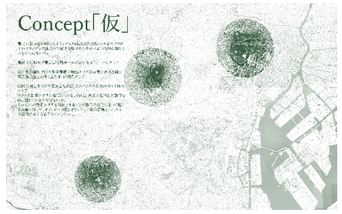
メンバーとの顔合わせと対象地選定。
1964 年を意識した提案へ



PHASE 2

対象地の決定

行幸通り、代々木公園、駒沢オリンピック公園の 3 箇所に。



PHASE 3

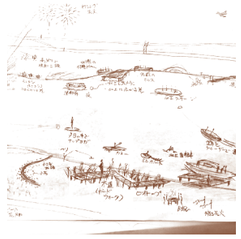
中間発表

既存の都市施設を利用し、都市のあり方を考える聖火台広場の提案。しかし、私たちのやりたいことを伝えることができなかった。対象地を 3 つから代々木公園 1 つに絞ることに決定。

PHASE 5

ソーシャルムーブメントを意識

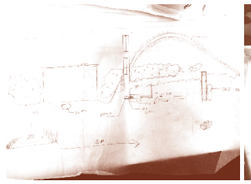
やりたいことを再確認して、ミズベリングを参考にすることに。取り入れたいものをイメージで表現。



PHASE 6

敷地のスタディ

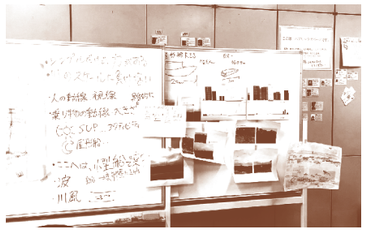
河川敷の賑わいを創出するような空間にすることに決定。
Program などを中心にスタディしていった。



PHASE 7

提案の再検討

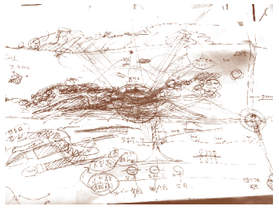
チューターさんたちと何回も話し合いを重ねて、やっと自分たちがやりたいことが見えてきた。

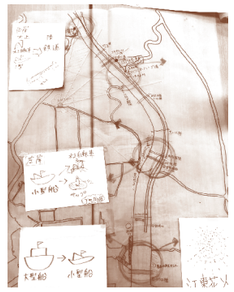


PHASE 8

デザイン軸の決定

スカイツリーを聖火として考え、荒川でポイントとなるような地点をデザインしていった。

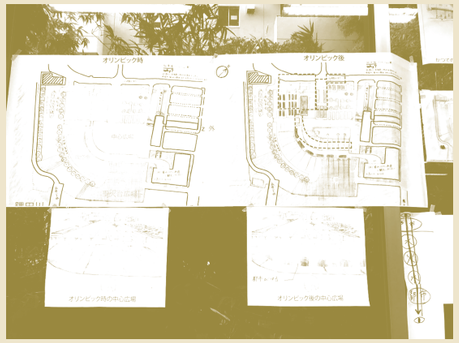


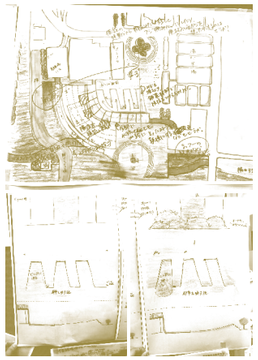


PHASE 5

中間発表

聖火は視認性を意識して隅田川の水辺に配置し、水位によって上下するフロート型に。
また、市場機能を景観に昇華させるようなデザインを検討した。

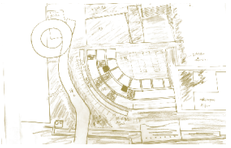




PHASE 6

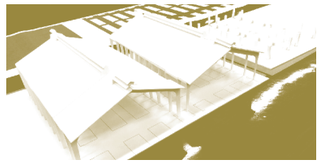
詳細検討

提案の肝である敷地中央の水鏡のデザインを検討。オリンピック前後で作り変えられる予定の環状２号線の形状や観光的視点からの機能も提案。



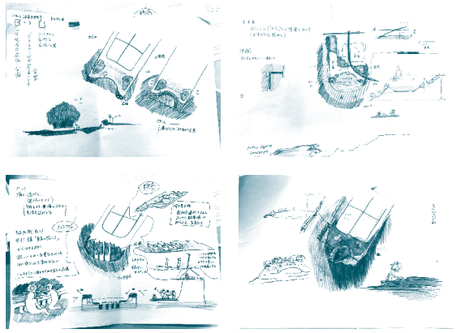
PHASE 7

模型の制作



(S=1:100)

最終発表に向け模型制作。何度も行ったはずの築地から物がなくなったときのスケールの大きさを初めて実感した気がした。



PHASE 4

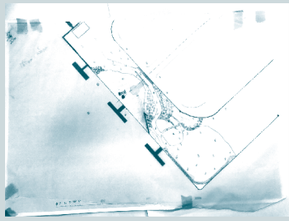
アイディアの具体化

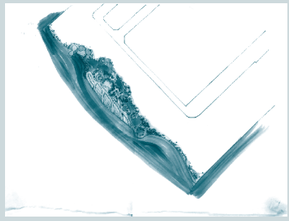
どの公園のどの部分にどのような機能を持たせるのかおおまかな平面図を用いて作成。概念的な広場は内港地区を囲うエッジ全体だが、特に力を入れる対象地として晴海ふ頭公園を選定した。

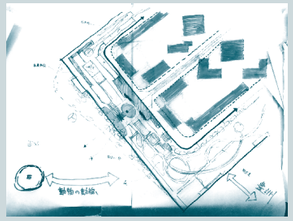
PHASE 5

中間発表

実際の平面図をもとにスケッチ。各々が考えていることをスケール感を持って平面図へ書き起こし思っていた以上に広くて困惑。







PHASE 4

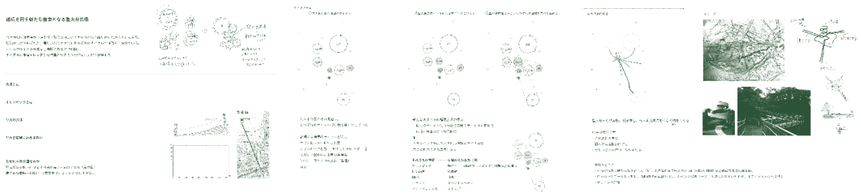
対象地の再調査

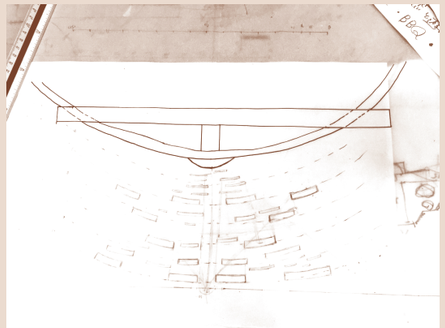
代々木公園の歴史を中心に改めて調査。それを踏まえて plan のスタディを行なった。

PHASE 5

方針の確定

代々木公園から周辺の渋谷や原宿を巻き込む方向性の提案へ。





PHASE 9

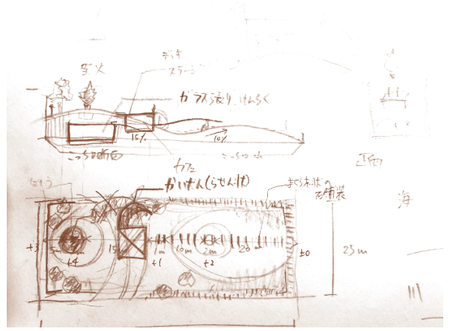
最終発表

河川敷の地形を操作して、新たな広場を作った。しかし、形だけしかできてなかったため、詳しい内容が詰めれていなかった

PHASE 10

デザイン案再検討

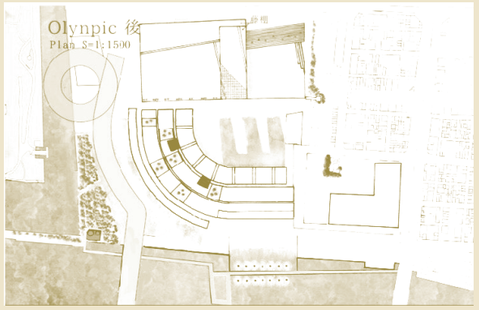
コンセプトの陸上・水上問わず、賑わいのある広場を突き詰めた結果、最終発表からデザイン案を一新し、河川敷に固定されていた広場を、水上を動く広場としてデザインした。

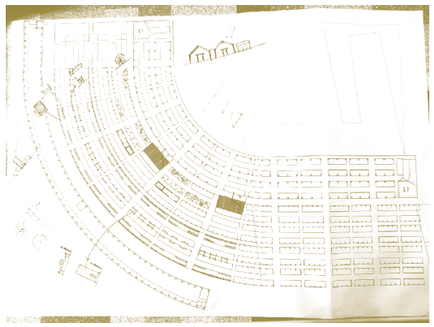


PHASE 8

最終発表

建築の活用法を考え、水鏡を中心に提案。
敷地のスケールの巨大さが影響し、
広場が人でにぎわうイメージを伝えきれなかった。

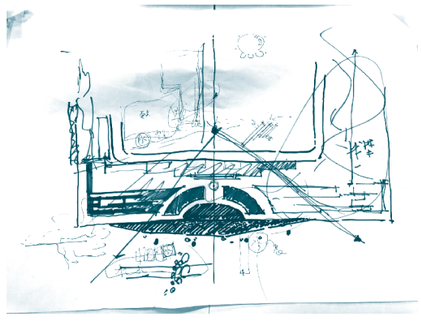




PHASE 9

詳細再検討

r 建築を中心にヒューマンスケールのデザイン検討。
人影が感じられる空間を目指した。
周辺の浜離宮庭園などとの連携を考えた植栽計画や
テーマにあった聖火デザインの検討なども重ねた。



PHASE 6

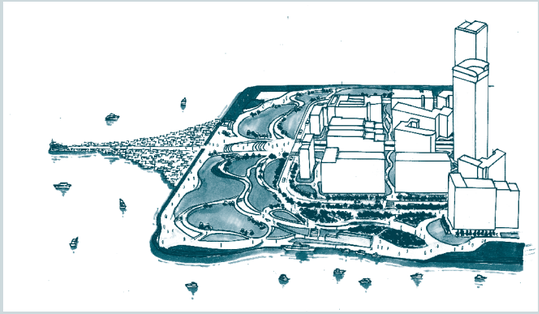
シンボル軸の制定

各々晴海通りから伸びる延長線をシンボル軸として定めた。聖火台の位置が明確に決まることで、広場内の空間構成が決まりはじめる。

PHASE 7

最終発表

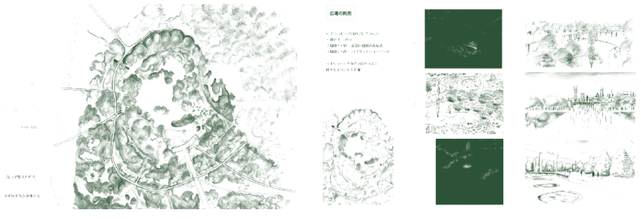
聖火台の活用方法までは深く踏み込むことはできなかったが、
人々が水と触れ合える多孔質な空間や野鳥が憩う緑のネットワークの形成が表現できた。

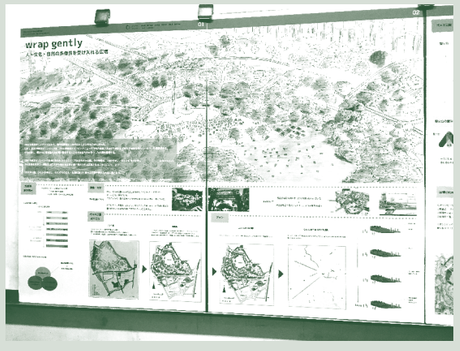


PHASE 6

平面図、スケッチの作成

代々木公園内とその外部に広がるようにデッキを配置。そのデッキを利用して聖火台を見る人々の賑やかな様子を描いた。





PHASE 7

最終発表

代々木公園と聖火台、そしてたくさんの人々がそれを囲う、賑やかなパースにすることになった。
しかし肝心のどのようなものを作りたいのかを伝えることができなかった。

GOAL

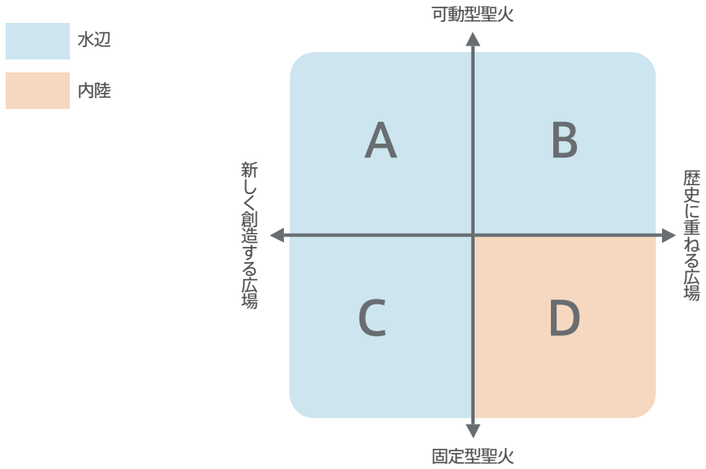
まとめ

聖火があれば聖火台広場なのか

聖火台広場ときいてまず思い浮かぶのは聖火であろう。
しかし、聖火があるだけで広場は聖火台広場になるのだろうか。

4班の相関：聖火と広場の在り方

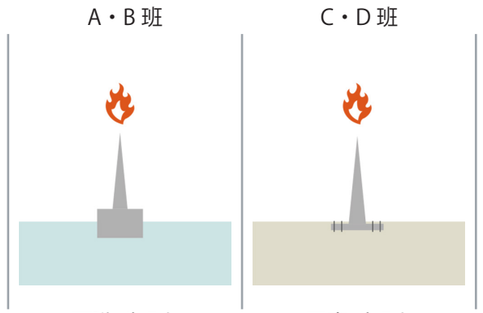
ここで、4班の提案を“聖火”と“広場”という2つの要素に分けて分析する。



聖火と広場の在り方は、それぞれ大きく可動型聖火 / 固定型聖火、新しく創造する広場 / 歴史に重ねる広場の2つに分けられた。さらにそれを相関図にまとめると上図のように4班がそれぞれ異なる組み合わせをとることが分かった。

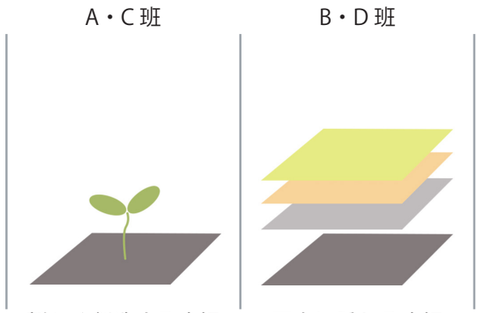
聖火

A・B班は聖火台を非固定型とし、聖火を空間の特性を浮かび上がらせるための媒介物として扱った。一方、C・D班は聖火台を固定型とし、聖火を空間を象徴するシンボリックなものとして扱った。



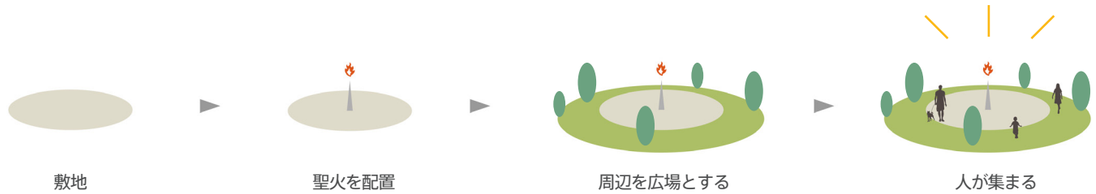
広場

A・C班は現状目を向けられていなかった土地に聖火台広場を設け、その土地の特性を活かした新たな魅力をもつ未来へと残る広場を目指した。一方、B・D班はすでに何らかの役割を持っていた土地に聖火台広場を設け、その土地の歴史を活かして変化しながらも伝統を受け継ぐ広場を目指した。



聖火台広場で描かれたストーリー

聖火を水上を走る船においたA班、川面に浮かべたB班、湾の中心に置いたC班、ペデストリアンデッキと組み合わせたD班。ここまで各班の提案を 2 つの項目に分けて比較をしてきたが、全ての班に共通して言える点がある。聖火台広場の提案において、どの班も視認性を最も重視した点である。その理由は各班が考えた聖火と広場の関係性にあると考える。まず、どの班も「聖火」というオリンピックにおいて特別性を持った火を求心性のあるものと捉えた。そして、それを敷地の中へ置くことでその周辺を聖火台広場として定義づけたのである。つまり、ある 1 つの空間に聖火というある種のモニュメントを持ち込み広場にすることで人が集まるというストーリーを描いたのである。



聖火台広場に必要な要素

しかし現実的に、聖火を置くだけで人々はそこに集まるのだろうか。2020 年東京オリンピックはプロモーションとしての役割も担っている大会である。ここで私たちが選んだ対象地の位置を見てみると、興味深いことに、どれもかつての東京市域の周から外に偏っており、東京の中心からは少し離れた場所となっている。交通アクセスが悪いというわけではないが、どの班も今まで積極的に活用されていなかった場所をディスティネーションにするというような提案を行ったわけである。これらを考慮しても、おそらく聖火を置くだけでは聖火台広場は”オリンピック”という一時的な利用なってしまうだろう。持続的に世代を超えて愛され続ける聖火台広場であるためには、やはり人々に必要とされ続ける要素が必要となってくる。私たちの提案では、この「人々に必要とされるデザイン」が足りなかったといえる。解決のためにマーケティング的要素を提案から織り込むことが重要になるのではないかと考える。環境や地域社会の持続性を配慮したうえで、どれだけの人を集客し、どのくらいの経済効果を生む広場なのか。人々を集めるだけでなく、人々の活動内容や利益の生み出し方までデザインをすることが必要であった。政府は、2020 年の訪日外国人観光客数 4000 万人※という目標を掲げた。オリンピック時にはこれまでになく多種多様な人が東京に集まることが予想される。人種、文化などが多様化するように、ランドスケープもより多くの要素を考慮したデザインが重要なのではないだろうか。

※明日の日本を支える観光ビジョン構想会議（2016）『明日の日本を支える観光ビジョン=世界が訪れたくなる日本へ―』

サマスタ2018　スケジュール

B 班員全員でレンタサイクル
現地のスケール感や雰囲気
を掴んでいった！

C 作業の合間に貴重な睡眠

D 最終プレゼンまで
２週間であるこの時に、
対象地に変化が・・・

C 持ち寄った案を
チューターさんに説明

B 最終発表に向けて模型制作。
模型初心者が多く作業が難航
したが、なんとか完成。

7 /14
＃1 ミーティング

キックオフ
話題提供
嵯峨寿　先生
「「聖火台広場を提案する」その
大義名分を訴える際の手掛かりとして」
田中伸彦　先生
「観光の動向を踏まえて聖火台広場を
考えるデスティネーションマネジメント
とランドスケープデザイン」

C 現地調査でレンタサイクル
してお台場周辺を見学

7 /28
＃2 ミーティング

プレサーベイ発表・敷地選定
話題提供
岩佐明彦　先生
「包摂型社会における
広場の可能性」

A デザインを考えるために、急い
で、スタディ模型を作成

8/11
＃3 ミーティング

中間発表・ゲストによる
クリティック
ゲスト 渡邉竜一　先生
大野暁彦　先生
岩瀬諒子　先生

C 並べて初めて案がまとまって
ないことに気付く

8/18
＃4 ミーティング

チューターによる
エスキスのクリティック

A 研究室に泊り込みで最終発表に
向けて、最後の追い込み。

8/25
＃5 プレゼン

最終発表
審査員　中間発表ゲストに加え、
審査委員長　阿部伸太　支部長

B 学会発表に向けてブラッシュアップ。
泊り込みで最後の追い込み。
・・・気づけばみんな冬服。

12/15
関東支部大会

2005年～2018年の14回で
累計385人の学生が参加しました。

造園系のみならず、様々な学部・学科の参加者がいます。
それぞれ持っている知識や技術が違うので、議論や作業を通して
新たな発見があり視野が広がりました。実務者であるチューターさんからは
自分たちのアイデアを表現する方法や、提案の組み立て方等を学びました。
また、活動のなかで模型作成・プレゼンなどで様々なことに挑戦するので
自分の得意なこと・足りない部分を知ることができました。

参加学生の大学、チューターさんの事務所紹介　2015～2018

中央大学
法政大学
明治大学
千葉大学
学習院大学
東京農業大学
工学院大学大学院
宇都宮大学
立教大学
日本大学大学院
多摩美術大学
武蔵野美術大学
千葉工業大学
横浜国立大学大学院
東京理科大学大学院
東海大学
日本大学
立教大学
慶應義塾大学大学院
芝浦工業大学
東京大学大学院
東京大学

■アイボリィアーキテクチュア　■グラック　■日建設計　■向日葵設計　■ランドスケープデザイン
■アプル総合計画事務所　■junko awatani　■ネイ＆パートナーズジャパン　■ヒュマス　■渡辺美緒デザイン事務所
■E-DESIGN　■大成建設　■ハイアーキテクチャー　■プレイスメディア
■オットー・デザイン　■竹中工務店　■長谷工コーポレーション　■フィールドフォー・デザインオフィス

STUDENTS

[多摩美術大学]

侯斯弋　美術研究科デザイン専攻 M1
中田朱音　美術学部環境デザイン学科 B3
長尾梓　美術学部環境デザイン学科 B3

[千葉大学]

[redacted]　[redacted]
谷本実有　園芸学部緑地環境学科 B3
出立琳　園芸学部緑地環境学科 B3
田中真由　園芸学部緑地環境学科 B2

[東京農業大学]

岩瀬晃　農学研究科造園学専攻 M1
野尻明里　地域環境科学部造園科学科 B4
稲川修平　地域環境科学部造園科学科 B3
岩切菜月　地域環境科学部造園科学科 B3
小川直哉　地域環境科学部造園科学科 B3
國井優樹　地域環境科学部造園科学科 B3
久保翔太郎　地域環境科学部造園科学科 B3
小山津平　地域環境科学部造園科学科 B3
差波楓　地域環境科学部造園科学科 B3
西崎太晴　地域環境科学部造園科学科 B2

[東海大学]

松田彩花　観光学部観光学科 B3

[日本大学]

廣田龍平　理工学部建築学科 B4

[法政大学]

田邊喬太　デザイン工学部都市環境デザイン工学科 B4
西内元活　デザイン工学部都市環境デザイン工学科 B4

TUTORS

井野貴文 [株] グラック　**大石茉由佳** [株] 日建設計　**大木一** [株] オットー・デザイン　**岡田裕司** [株] ネイ＆パートナーズジャパン
小澤亮太 [株] フィールドフォー・デザインオフィス　**岸孝** [株] プレイスメディア　**小林祐太** [株] プレイスメディア　**杉山茂樹** [株] 日建設計
原﨑寛明 ハイアーキテクチャー　**向山雅之** [株] 竹中工務店

GUESTS

嵯峨寿（7/14 話題提供）
日本オリンピック・アカデミー (JOA) 理事
日本オリンピック委員会 (JOC) オリンピック・ムーブメント専門部会員

田中伸彦（7/14 話題提供）
東海大学観光学部観光学会　教授

岩佐明彦（7/28 話題提供）
法政大学デザイン工学部建築学科　教授

渡邉竜一（8/11 中間発表ゲスト、8/25 最終発表審査員）
株式会社 ネイ＆パートナーズジャパン　代表取締役
法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科　専任講師

大野暁彦（8/11 中間発表ゲスト、8/25 最終発表審査員）
名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 講師
株式会社 エスエフジー・ランドスケープアーキテクツ 代表取締役

岩瀬諒子（8/11 中間発表ゲスト、8/25 最終発表審査員）
岩瀬諒子設計事務所　主宰
東京藝術大学美術学部建築学科　教育研究助手

（敬称略）

参考文献

日本オリンピックアカデミー編（1981）『オリンピック事典』プレスギムナスチカ.

山田 謙弌（2005）
「人が中心となる広場のデザイン手法の研究
～イタリアンピアッツァが持つ特質の日本の広場計画への変換～」
『景観・デザイン講演集　No.1』

都市デザイン研究体（2009）『復興版 日本の広場』彰国社

明日の日本を支える観光ビジョン構想会議（2016）
『明日の日本を支える観光ビジョン=世界が訪れたくなる日本へー』

レポート学生編集委員

出立琳（編集長）・谷本実有（副編集長）・岩切菜月・久保翔太郎・田中真由
西内元活・松田彩花

学生デザインワークショップ企画・運営委員

向山雅之（竹中工務店）
井野貴文（グラック）　大木一（オットー・デザイン）
岸孝（プレイスメディア）　小林祐太（プレイスメディア）　杉山茂樹（日建設計）

Design : COTONA Inc.